

14 『黄帝内经明堂类成』と『甲乙经』の比較

木場 由衣登

後漢代頃に成立したとされる『黄帝明堂经』（以下『明堂』と略称）は、经穴の名称と位置、その治療効果と刺激適応量が系統的に記載された最古の孔穴書で、孔穴選択のための重要な典拠となる書であるが、早くに散逸し、現在では『鍼灸甲乙经』（以下『甲乙经』と略称）や『黄帝内经明堂类成』（以下『明堂类成』と略称）、敦煌莫高窟出土文書の『明堂经』残卷等に断片として見られるにすぎない。ちなみに、『甲乙经』に見る『明堂』由来の条文は、『外台秘要方』『医学綱目』等に引用され、『千金方』も含めて校勘資料は豊富である。一方、『明堂类成』については、残卷一卷と『医心方』巻二に引用された经文と注が、現在うかがいうるその全てである。『甲乙经』の『明堂』部分は巻七から巻十二に各病門ご

とに分類記述され、各条文末に主治穴が記されている。一方、『明堂类成』では经穴の位置と適応刺激量が述べられた後、主治病証が続く。敦煌本『明堂』と比較すると、『明堂类成』の記載方式は经脈の流注を意識しており、本来の『明堂』とは形式や文体が異なっている可能性が高い。

なお、この『明堂』については、過去に石原明、藤木俊郎、小曾戸丈夫らの試案のほか、桑原明、黄龍祥、愛媛東洋医学研究所、北里研究所東洋医学総合研究所等による幾つかの復元例がある。

今回は先ず『甲乙经』に記載される『明堂』由来の条文と『明堂类成』の条文を比較して、その相違点を確認し、次に皇甫謐と楊上善がそれぞれのような意図により『明堂』を引用したのかを検討してみたい。『明堂类成』の完全に現存する部分は巻一の「手太陰」の经脈のみであるため、『甲乙经』もそれに対応する巻三・第二十四の经穴と巻三・第十七の中府穴を対象とした。これらの条件下で左記の項目について二書を比較した。

一 经穴名と经穴順位の比較

『明堂類成』巻一に記載される経穴を順に挙げると「中府・天府・俠白・孔最・列欠・経渠・太淵・魚際・少商」の九穴である。『甲乙経』は「少商・魚際・太淵・経渠・列欠・孔最・俠白・天府」の八穴である。

『甲乙経』では四肢における経穴の順位を末梢から体幹側へと並べており、『明堂類成』はこれと逆方向に経脈の流注に沿って経穴を置く。

二 経穴の位置

字句の異同が少し見られるが、内容的に大差なし。

三 刺入や灸の壮数等の刺激適応量

二書の間で大きな違いは見られないが、孔最穴と俠白穴等で『甲乙経』にのみ記載される箇所が存在する。

四 主治病証とその構成

条文の病証部分を『甲乙経』『明堂類成』両書で比較すると、『甲乙経』においては分解されている条文が『明堂類成』では連続している。原形の『明堂』が連続した条文であったことは敦煌本『明堂』と比較しても明らかである。これら二書の間を詳細に見ていくと、左記のような法則が見られた。

①『明堂類成』では楊上善の註によって条文が区切られているが、この切れ目が『甲乙経』における一条文としての区切りと等しい場合がある。

②『甲乙経』の条文「胸中彭彭然甚則交両手而督暴痺喘逆刺経渠及天府此謂之大俞」中にある「此謂之大俞」の五字が『明堂類成』の天府穴では「此胃大輪」、経渠では「此胃之大輪」と記載される。これは『甲乙経』において片方が排除されたのではなく、『明堂』でも『甲乙経』と同じ形式の条文だったとも考えられる。

③『甲乙経』では単一の病証に対する主治穴を多く引用することで「諄瘡取完骨及風池大杼：皆主之」のように構成する場合がある。この他、「痺」「瘡」「喉痺」等でも同様のものが見られた。

④「写魚際、補尺沢」のように条文中に複数の経穴が含まれる場合、『甲乙経』は一条文として収まり良く区切れるが、『明堂類成』では連続して記載される。

最後に『甲乙経』と『明堂類成』は相互に校勘資料となり得るが、今後は『明堂』がどのような資料から編纂されたのかを推定したい。
(日本鍼灸研究会)